

# 認知症利用者に対する時間帯観察を行って

～そこから見えてきたもの～

施設名：老人保健施設 白寿園

発表者：通所介護はるかぜ 金城美佳

（はじめに）

認知症ケアは見守りと観察が基本であり1人1人の日常生活リズムを阻害する事なく目で確認出来る範囲で行動を観察し、状態把握を行う事が重要である。その基本をもとに今回、はるかぜ利用者全員を対象とし1人1人の行動や言動、精神状態を時間帯で区切り観察を行った。その中で行動パターンが特に明確に見えた利用者を報告する。

（目的）

・生活リズムや精神状態の行動パターンを把握し、本人にあったケアが提供できる。

（実施期間）

6月23日から10月31日までの約4ヶ月間

（対象利用者）

通所介護はるかぜ利用者 7名

（その中の1名を事例として挙げる）

事例1 -

アルツハイマー型認知症利用者

年齢89歳 女性 要介護4

（実施方法）

認知症ケアに使用されるケアマネジメントセンター方式を参考に利用者の状態変化を記入する表を作成する

9:45～16:15までの利用時間を30分ごとに区切り、その精神状態を5段階に分け記録する。

この5段階評価とは、1人1人の行動パターンを把握するために基準法を共通せず個々にあった基準点を決め評価する。

（各利用者によって基準点は違う）

在宅での状況や夜間状態、睡眠時間等は家族情報を参考とする。

（経過）

家族によると、夜間は入眠せず独語を発している。

内服は家族管理できちんと服薬させている。

朝のお迎えの際から入眠傾向が強く午前中の活動の導入が困難な状況である。しかし、昼食後より

覚醒され、反響言語が多く出現する。

（職員の声かけに対しオウム返しのように同じ言葉を繰り返す）

（結果）

1. 5段階評価した結果、Yさんの原因は昼夜逆転で夜間の睡眠時間が大きく関わっている事がわかった。（午前中ほとんど入眠が強く午後から覚醒し反響言語、行動が出現する。）
2. 現在服用している内服薬の薬効も現れていないように思われた。
3. 職員が利用者に対して介入していないといけない時間帯も見えてきた。

（考察1）

Yさんには、人間が本来持っている生体リズムが高齢のため働きが弱くなり活動不足になるため不眠症状が現れてくる事から睡眠と覚醒のメリハリが小さくなり生体リズム自体が十分に働かなくなる事で夜中に目が覚めやすく逆に朝に居眠りをしてしまう昼夜逆転が考えられる。

（まとめ）

観察を通して、中には生活リズムが安定せず時間帯行動が掴み取れない利用者もいた。また、内服にも関係性があると思われるので今後確認していく課題である。

安定した生活リズム形成のためにも今回の結果を活かし積極的な介入が必要である事から職員が1人1人にあったケアを目指しサービスに取り組んでいきたい。